国際交流事後活動ニュース

MACROCOSM

マクロコズム 2005.1

◎特集　21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい

vol. 62

(財)青少年国際交流推進センター

更なる国際協調に向けて
～出会いから共同活動の実施へ～

オープニングプログラム

◀ 山本信一郎政策統括官と招へいナショナルリーダー

「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業は、昭和34年の当時の皇太子殿下であられた今上陛下の御成婚を記念して開始し、その後40年にわたって実施してきた内閣府の青年国際交流事業を総括するとともに、21世紀のスタートにふさわしい新たな交流事業として2001年から実施している事業です。20か国から各国4名（4コース各1名）が招へいされ、東京のオープニングプログラムから始まり、日本青年を含めてディスカッションを行うヤングリーダーズ・フォーラムの後、コース毎に地方プログラムを体験して、最後にグローバル・ユース・カンファレンスでまとめを行います。今年度の事業では、「更なる国際協調に向けて～出会いから共同活動へ～」を総合テーマに実施しました。ITの普及や交通網の発達で、世界はますます国境なきものとなっています。情報を送受信することが以前より容易になり、国を越えた協力活動やコミュニケーションはより積極的に行われるようになりました。しかしながら、国際協力分野での進展においては、お互いの尊重と相互理解に基づいた国際協調の概念が十分に浸透していないようです。

そこで、本事業では、21か国から集まる参加者が、国際協調についての共通認識をもつことを起点としました。そして、視野を広げるきっかけや、情報を効果的に活用するための知識を提供し、責任感を身につけることによって、参加者が個人、グループ（例：コース、参加国代表団等）、又は組織（例：事後活動組織等）として、国際協調につながる共同活動を発足させることをねらいとしました。今回、発案されたプロジェクトがどのように具体化され、構築されたネットワークがどのように活用されていくかを期待するものです。

各コースの成果発表

▲ 開発コース

パブリックリレーションズコース ▼

▼ マネージメントコース

▼ 教育コース

コースを越えたコミュニケーション

楽しい交流の場も ▶

ルネッサンス　カフェ

グローバル・ユース・コンファレンス（2004.10.19）

パネルディスカッション

各国毎に帰国後の活動計画を作成

国毎の活動計画発表

評　価　会

活動への評価コメントをする重里参事官補佐

修了式

「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業のオープニングプログラムとして行われた立教大学田中治彦教授による基調講演の要旨です。田中教授は、英語で講演されましたので、本文は、その要旨を翻訳したものです。～2004年10月8日／東京全日空ホテル～

「国際協調に向けてNPOが果たす役割」

立教大学文学部教授　**田中治彦氏**

皆さん、こんにちは。再び日本にようこそ。本日この場にお招きいただいて、大変嬉しく思っています。皆さんは「にっぽん丸」の交流事業の既参加青年ですが、私もその一員だからです。私は30年近く前、1975年の「東南アジア青年の船」事業（SSEAYP）に参加しました。当時は若くてまだ大学生でした。参加した多くの方が感じられたように、この事業は私にとって大変素晴らしい出来事でした。1975年のSSEAYPに参加した後、私は大学院に進み、ユースワークと社会教育を学びました。修士課程のテーマは、主に英国と日本におけるユースワークでしたが、論文を仕上げた後、アジアにおける青少年交流と、教育に関する新しい研究テーマを探していました。「にっぽん丸」での体験から得た何かをテーマにしたかったのです。

4年後の1979年に、ようやく開発教育というテーマに出会いました。開発教育は、南北問題や開発問題に関する、新しい教育運動です。嬉しいことに、開発教育は私が求めていた全ての要素――アジア、青少年交流、教育、ボランティア、NGO・NPO――を満たしていました。したがって本日の講演タイトル「国際協調に向けてNPOが果たす役割」は、まさしくSSEAYP後の私の人生について語ることになります。

国際協調とは何でしょうか？　それは、友情、幸福、発展、貧困のない暮らし、寛容、互いを尊

主な内容

21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい
「国際協調に向けてNPOが果たす役割」… 5～9
ODA50年（最終回）……10～13
ターニング・ポイント ……14～15
第20回全国大会佐賀大会 ……16～18
第3回「青年の船」35周年記念宮崎大会 …19
青少年国際理解セミナーの開催 ……20
「東南アジア青年の船」報告会
「航空機による海外派遣」事業報告会
「にっぽん丸」船上パーティーのお知らせ…21

〈表紙の説明〉

国際青年育成交流事業
地方旅行より

敬すること、公正、正義、戦争のない世界、音楽、芸術、それともインターネットなどでしょうか？　数々のイメージがあるなかで、今日は3つの観点からお話したいと思っています。一つ目は、様々な国家、宗教、文化の中で共に生きるということ。つまり、「共生（coexistence）」「共生の（symbiotic）」「共生社会（cohesive society）」です。日本語の「共生」とは、共に生きることです。この講演では、「共生」とは国家、人種、宗教、文化に関係なく、「共に生きる」ということと定義します。二つ目の観点は、南北間、富める者と貧しい者との間での公平性です。グローバル化が進む中で、すべての国は、富裕な国と貧しい国とが存在することによる社会的危機に直面しています。公平性は、富める者と貧しい者、南北諸国間の格差をなくし、国際協力を達成するために大変重要です。三つ目の観点は、循環（circulation）です。これは環境に関する言葉です。私たちは天然資源や美しい自然を保護するだけでなく、人々のつながりや自分自身が暮らす社会環境も保全しなければなりません。

次に、NPO即ち非営利組織とは何かということを定義しなければなりません。他に、NGO（非政府組織）、ボランティア組織、民間事業者、第三セクターなどの言葉がありますが、ここではほとんど同じ意味に使います。非営利団体とは、第一に、非政府組織、つまり民間であるということです。第二に、それは非営利で、公共の目的のためのものであって、特定の団体に収入や利潤をもたらさないということです。最後に、自発的かつ自立しているということです。NPOは民間の学校、病院、社会奉仕団体、財団法人、基金、協同組合、労働組合、その他様々な活動の形をとっています。そして健康、教育、社会奉仕、宗教、地域開発、国際協力、環境、資金助成、その他多くの目的のために活動しています。

なぜNPOなのか

なぜ今日NPOについて話し合うのでしょうか？　私たちの社会には四つの活動分野（セクター）があります。1. 政府、2. 企業あるいはビジネスセクター、3. 地域社会、そして4. NGO・NPOです。政府は、社会発展と国民福祉の推進のために、主要な役割を果たし、法の制定、道や港の建設、電気の供給、農業、教育、水の供給などを行っています。近代社会では、政府が国の発展と福祉のために重要な役割を担うようになりました。次に、ビジネスセクターは、商業取引つまり、製品の生産と販売を扱っており、経済成長に貢献しています。表の一番下に、地域社会とNPOとありますが、ここで言う「地域社会」とは、伝統的な地域社会です。従来の地域社会では、人々が助け合い、共に働き、互いの世話をし、支えあいます。このセクターは、政府や、ビジネス、企業よりも、私たちの生活に密着しています。しかし、経済が発展し、都市化が進むにつれて、村から町へ出てくる人が増えたため、町では知り合いや友人が誰もいないということが起こり、都市の生活は、時には大変困難なものになりました。都市化と産業化が進むにつれ、人々は孤立し、時には隣人の顔すら知らないという状況になりました。国によっては、依然として地域社会が存在し、重要な役割を果たしているところもあります。例えば、アジア経済危機の最中の1998年、都市では多くの人が失業しました。例えばタイのバンコクでは大勢

が職を失いました。彼らの大半は、村に戻り、家族、父、母、祖父母、親戚と暮らしました。そこで経済が回復するまで、家族や地域の支えで生活を保つことができました。

伝統的な地域社会に代わって、先進工業国ではNPO（非営利、非政府組織）が、新しいセクターとして現れてきました。ヨーロッパ、アメリカのような西洋世界でさえ、NPOの歴史はおそらく100年から150年くらいのものでしょう。日本では、NPOという言葉が意識に上るようになったのは、1970年代です。つまり、NPOは都市部において従来の地域社会に代わる新しい言葉、新しいセクターです。なぜ今NPOが重要なのでしょうか？　先ほど述べたように、政府は社会発展の基盤作りに大きな役割を果たし、健康や教育のような社会サービス、そして平和を維持し、国民と国家を保護します。先進工業国の中には、すでにこれらの基本的な役割を果たし終えたところもあります。しかし、人々のニーズも多様化し、政府がそれに応えるのが難しくなってきています。政府のやり方が、あまりに遅く、官僚的だからです。また、日本や大半の欧米諸国のように、大規模な政府を税金で支えるのは困難となりました。その上、都市部における従来の地域社会は、現在ますます弱体化しています。そのため、都市では従来の地域社会に代わる新しい地域組織づくりが求められています。今話題にしているのは、人々の様々なニーズに応えることのできる、新しい社会組織の形、新しい社会団体の形です。産業の発達に伴い、NPOの役割が大きくなります。

国際協調と教育NPOの役割

国際協調と教育NPOの役割について述べましょう。私が代表理事を務めている開発教育協会（DEAR）は、国際協調のための開発教育を推進する目的で1982年に設立されました。DEARは、日本全国で開発教育に関する地域セミナーを行ってきました。この10年間に各地方、県で約50のセミナーを開催しました。参加型学習やワークショップも多くの学校で紹介されました。また国際協力について、国内でのネットワーク作りや西欧諸国との情報交換も行ってきました。開発教育はグローバルな問題を理解するための教育なのです。同様にDEARは、アジア太平洋諸国と、持続可能な開発のための教育を推進するためのネットワークを構築しています。

開発のテーマは多岐にわたり、非常に難しいものです。そのためここではDEARの定義する開発教育に話題をしぼるつもりです。DEARの開発概念は、二つの国際会議の理念に基づいています。ひとつは、1995年コペンハーゲンの社会開発サミットで提唱されたものです。そこでは、経済開発はそれ自体重要ではあるが、社会開発と呼んでいるものの一部に過ぎない、また人間開発が、開発プロセスの最終結果であるべきであると強調されています。二つ目は、2年前の開発と環境に関するヨハネスブルク・サミットで提唱されました。このサミットで、持続可能な開発について話し合われましたが、これは1992年のリオ・デ・ジャネイロの地球サミットで最初に提唱されたものです。地球サミットでは、持続可能な開発という言葉は、環境保全、地球温暖化、森林破壊のよ

うな環境問題に重点を置いて用いられていました。ヨハネスブルク・サミットでは南北問題に重点を置き、環境問題だけでなく、貧困の撲滅と人口問題にも焦点が当てられました。

開発教育とは、正規の学校で行われるものだけでなく、地域教育や成人教育のようなインフォーマルな教育も含めた教育、または学習過程であると定義しています。開発教育とは、開発問題やいわゆる南北問題に対する認識と理解を深め、よりよい未来のための開発について議論し、人々の態度やモラルを改善し、その結果、開発問題の解決に積極的に取り組むようにしむけることです。教育とは、知識を教えるだけでは、十分ではありません。人々の態度を変えることが重要なのです。私が初めて「開発教育」という言葉を耳にしたのは、1979年、東京で開催された開発教育に関する最初のシンポジウムで、国連、青年海外協力隊（JOCV）の元隊員、YMCAその他の団体の共催によるもので、シンポジウム後、参加者たちは、発展途上国や南北問題などの様々な開発問題にさらに意識を向ける必要性を実感しました。そしてアジア近隣諸国やその他の「南側の国々」との連携をさらに強化していかなければならないと感じました。開発教育の一番の目的は、国際協調、つまり国家、宗教、文化の違いを超えて共生することです。その次の目的が、南北間、つまり富める者と貧しい者との間の公平性、それに環境保全です。これが持続可能な開発のための教育です。

持続可能な開発のための教育の理念は、1992年リオ・デ・ジャネイロの地球サミットのアジェンダ21で集約され、日本政府は、2002年のヨハネスブルク・サミットに向けて、「持続可能な開発のための教育の10年（DESD）」を提案しました。国連は、2002年、2003年、2004年にDESDの決議案を採択しました。「ミレニアム開発目標2000－2015」でも同様の内容、「万人のための教育(Education for All)」が採択されています。2015年までにすべての子どもが初等、中等教育を受けられるようにするというものです。持続可能な開発のための教育(ESD)で、ユネスコは4つの目標を提案しました。即ち、基礎教育の推進、既存の教育プログラムをESDの方向へ転換させること、持続可能性に関する人々の認識を深めること、教師や教育指導者を対象にした訓練です。すべての人がESDの担い手になるように呼びかけられています。政府は、持続可能な開発のための教育に関する施策を策定し、地方セクター、ビジネスセクター、NPO、地域社会が協力し合うように働きかけねばなりません。

先ほど述べたように、国際協調、つまり様々な国家、宗教、文化の中で共生することは、持続可能な社会を実現するための最重要項目の一つです。2001年9月11日以降の世界情勢はかんばしくありません。多くの国々で紛争が起こっています。これには二つの原因があると思います。一つ目は、他の文化、宗教に対する不寛容。二つ目は、1990年代に急速に進んだ経済のグローバル化です。1990年代、急速にグローバル化が進み、国家間の貧富の格差がますます広がり、国際社会が不安定になったことです。

共生社会で生きる

「にっぽん丸」船上ではキャビン・メイト同士や、同じグループ内でもめごとがたくさんありましたが、それでも最後には私たちはお互いを理解し、尊敬することができました。しかしそういったことは、社会生活をする上で日常的なことです。私たちは 多くの問題を克服し、他の文化、国々、人々を尊敬し、理解するようになりました。船の事業後、私たちは、もはやタイから来た人、フィリピンから来た人、日本から来た人ではなく、互いに田中、ウィライ、チャンと呼び合う仲になりました。私たちの関係は、人と人の関係になったのです。船では、イスラム教徒、仏教徒、キリスト教徒、ヒンドゥー教徒、神道、その他のたくさんの宗教がありました。にもかかわらず私たちは理解し合い、少なくとも尊重し合っていました。そしてこのことが、新しい世界を作るための出発点なのです。周知のように、私たちは「共生社会」の体現者です。そのことはもう証明済みですし、皆さんもこの事業の中で証明することでしょう。

この事業が終わった後、私たちの役割は大変重要です。皆さんの中にもすでに新しい平和な世界を作るために、それぞれの地域社会、NPO、企業、政府で行動を起こしている人もいるでしょう。そのことを誇りに思うべきです。私たちの事後活動組織はNPOの一つであり、私たちが新しい世界を作るための努力をし、共に生きる世界を実現できればと考えています。世界の現実は実際には非常に厳しいものですし、私自身挫折しそうになることもあります。しかし、私は自らの原点として1975年の自分の経験に立ち帰ることによって、調和のとれた国際社会を構築しようとする人々の存在と、その努力を常に信じることができます。それが私にとって新たな活力になるのです。

＊田中治彦氏（1953年に東京に生まれる。）
岡山大学教育学部助教授を経て、現在は立教大学文学部教授並びに（特活）開発教育協会代表理事を務める。
内閣府青年国際交流事業には、第2回「東南アジア青年の船」に参加した後、第28回「東南アジア青年の船」アドバイザーとして乗船。

ODA50年
～開発援助の原点を考える（最終回）～

（特活）メコン・ウオッチ代表理事　**松本　悟氏**

〈ODAが抱えるもう一つのテーマ〉

これは昨年「NHKクローズアップ現代」で放送されたものです。ODAはとても重要で、人々の生活向上に役立っています。例えば、コトパンジャンダムにしても水力発電によって恩恵を受けている人はいますし、タイの汚水処理プロジェクトによって、チャオプラヤ川の汚染対策になることも確かでしょう。しかし一方で、移転を迫られた住民、処理された汚水が流される場所で漁業を営む人から批判の声が出てきます。どちらが正しいかではなく、その両方が存在しているのです。誰が利益を得て、誰が問題を抱えるのか。電力によって受益する人からすれば、いいことになり、適切な補償を得られなかった人からすれば問題です。それぞれの言い分だけを言っていては、解決の糸口が見つからない。環境社会という面でODAが常に抱えているもう一つのテーマだと思います。

しかし、誰にとっての開発かというのは、政府開発援助でも、NGOの草の根援助においても、非常に重要です。よく住民中心の開発、参加型開発と言いますが、言うは易し、行うは難しです。「開発する」developという言葉は、deとenvelopという二つの言葉からなっています。deというのはoutですから、“envelop”封筒の中から何かを取り出す、ということが開発、発展です。もともと封筒の中に何かが入っていて、それを取り出すことがdevelopです。空の封筒に何かを入れることが開発ではないのです。つまり住民の封筒の中に、何が入っていて、住民はそれにどのくらい気づいているか。外部の者が支援することで、その気づきを助けられるのか。それを取り出すと何かいいことがあるのか。そういうことを一緒に考えられるかどうかが、とても大事だと思います。

最後に、私自身のラオスでの草の根の農村開発の経験をお話したいと思います。1992年から96年にかけてラオスにいました。村には、自分の子供と一緒に行きます。そうすれば、村人は私たちが援助目的で来たとは思わなくなるのです。男一人で行くと、出てくるのは村長などで、女性は近寄ってきません。それでは村人一人一人が何を考えているかに触れられません。家族で行くと、子供や女性が集まってきます。このときの経験から話をします。

〈井戸に学ぶ〉

井戸というとNGOや草の根援助の代表選手ですが、井戸はいろいろなことを教えてくれました。92年に初めてラオスに赴任し、村を回って驚いたのは、壊れたままの井戸がたくさんあったことです。様々な国際機関やNGOが援助しくれたということでした。直さないのですか、と訊ねると、コンクリートリングが要るので直してくれませんか、と言われるのです。まず感じたのは、村人と

一緒にやっていくことが信条のNGOの活動なのに、活動終了後、なぜ村人は自分達で直すことすらしないのだろうか、という疑問でした。大切なのは一緒に活動した後、どれだけ村人が自分で活動しているかということだと、その頃は漠然と思っていました。

ある日事務所に村人が訪ねてきて、この前そちらの団体に支援してもらった学校が、大雨で壊れたので追加の援助をしてほしいと言うのです。行って見ると、確かに穴があいている。自分達でトンカチで直せばいいと思うけれども、まず私達に援助を求めてくる。また、私達が人材育成のトレーニングセンター作りを支援した場所に、1年後モニタリングに行ったら、保育所になっていました。地域の人材育成のためにトレーニングセンターが必要だという話だったのに、いつの間にか、保育所になっていた。よく調べてみるとその土地の有力者が、その建物を作ることで自分の力で援助を持ってきたと村人にアピールしたかったのです。トレーニングをする気などなく、その建物を何に使いたいかと村人に訊いたら、保育所がいいという話になったそうです。そういうことをたくさん見ました。村人の生活を改善したり、自立を支援したりするためであっても、こういう小さな活動の目標はなかなか達成できていないのです。壊れた井戸を見るたびにそれを思いました。

達成できないのにはいくつか理由があります。NGOが村に行くと、村の有力者しか集まらず、彼らは援助慣れしています。例えば、米が足りないから灌漑を作ってほしいと言われます。よく話を聞くと、米が足りないというのは、一年の内4か月だけ米を買わなければならない、ということだったりします。援助する側は援助するものを探し、援助される側は何が欲しいかを探す、という関係で始まっているため、彼らが要求することが、本当に彼らにとって必要なことなのかがわからないのです。実は、開発NGOも援助してなんぼの団体なので、存続のためには次々に困っている人を探さなければなりません。ただ、寄付者に対して成果の報告ができないといけないので、成果を出しそうな人、意識が高く実行力がありそうな人を探して、そこに支援をする。その結果こういうことが起こるわけです。実は、本当に支援が必要な人達は、NGOが行っても声を出せず、計画を立てても、それを実施できるかどうかもわからない人達です。私はラオス語もできますが、そういうところへ入っていくのは大変です。これを政府の人がやるのは大変なことだと思います。コトパンジャンダムで、政府はこういうことをしていると確認することぐらいしか、国際協力銀行にはやりようがない。インドネシア政府も村人一人一人のことまではわからない。でもNHKが行って取材してみると、村人の声はこういうことを言っている。問題が起きてみないとそういう人の声が聞けない。そういうジレンマがあります。それはダムなどの大きなプロジェクトだからではなく、井戸にもあるのです。わたしは、それを井戸にまず学びました。

〈自立の支援とは〉

ラオスの中部のカムワン県で、89年頃から生活改善の支援をしましたが、その一つが井戸掘りでした。ブーフォアナタイという村で井戸掘りのセミナーを行ったとき、隣の村も関心を持って参

加しました。セミナー後、オブザーバー参加した隣の村が、何十本と井戸を掘り始めたのに、もともと井戸を掘るはずだったブーフォアナタイは一本目を掘りかけてやめてしまった。我々と一緒に活動している行政の役人は、あの人達は低地ラオ族ではなくて、中高地ラオ族という支配民族ではない別の民族で、ラオス語もよくわからないし、教育レベルも低いし、意識も低いし、怠け者だからやらないのだというのです。その村に何度か足を運んでわかったのですが、そこでは井戸は必要なかったのです。村の女性が、涌き水から水を汲んでくることは自分達にとって大事だと話してくれました。井戸よりも水を与えてくれる森を守ることの方が大事だと。それで、私達は森を守るにはどうすればいいのか考え始めました。ブーフォアナタイが抱えていた問題は深刻で、軍が施設を作るために村の森林を切り、森が破壊されようとしていました。社会主義国のラオスで、村人は軍による伐採に反対だとは言えなかったのです。我々が村に行くと、役人が付いてくるので、言えなかったのです。ようやく本音が聞けたとき、我々は何とかしたいと思い、ラオスの法律を調べ、村人には法律上自分達の森を管理する権利があることがわかりました。しかし、どうすれば村人がここは自分達の森だと指定できるのかという手続きがどこにも書かれていない。そこで手続きを県の条例で定めれば、ブーフォアナタイの人達は自分達の森を合法的に定めて、外からの伐採を防げるのではないかと思いつきました。そしていろいろ働きかけ、最終的に目標を達成できました。その後、そういうことが必要なところが他にもたくさんあることがわかりました。その中で気づいたのは、自立を支援できるのか、支援しないほうが、かえって自立するのではないかというジレンマです。いつかは自立するつもりで支援を受けているのか、援助機関が支援をしてくれるからそれでいいと思っているのか、そこはわかりません。ここまで支援したから自立してくださいと言って任せた後、駄目になっていくこともよくあります。そういう意味で、自立は支援できるのかと何度も悩みました。

キタナカイ村はまさに同じケースなのですが、この村の森はいったん伐採され、その後、林産物を取るために村人の手で復活させました。この森が国の計画でダムに沈むことになりました。ところが、まだダムの建設資金は確保されていないことがわかりました。村長にそれを伝えると、建設が決まれば仕方がないが、もし計画が取りやめになったら、その土地は自分達の森だから、自分達で使い方を決めたい、ということでした。ブーフォアナタイ村と同じプロセスを経て、森はキタナカイ村のものとして登録されました。3か月後、国営伐採企業がこの森を伐採したので、村人が抗議すると、どうせダムに沈むから伐採したほうがいいと言われたので、村長が県に相談すると、村人の権利を保障してくれました。これは村人が自分達で処理した例です。これは重要なことで、自立を支援するには、なるべく外からの提言を少なくすることです。お金、物ではない支援、例えば、行政と繋ぐことなどが大切だと学びました。

自立を支援することを難しくしている要因はたくさんあり、例えば、予算で動くということがあります。NGO補助金とか、色々なお金をもらって動いているので、12月に計画を立てて、提出

して、4月から3月に動かなくてはいけない。村人のニーズがどうして12月にちゃんとあがってくるのだろう？　村人の活動がどうして4月から3月で一セット終わるのか？　そこで成果を書かなければいけない。そこが難しいところです。このサイクルの中で住民中心の開発が可能だろうか？　もちろん、その枠をはずして自由にお金を使っていいとしたら、どういう混乱が起きるかは目に見えています。しかし、会計年度を決めて、予算は12月に出して、その資金に従って動かなければならない。項目を立て、10%以上多くも少なくもなってはならない。年度で使い切らなかったら、次の年からもらいにくくなるなど、そういう制度は、住民中心でやろうとした時、大きな障害でした。

ある県の国際交流協会が、当時、郵政省の国際ボランティア貯金のお金をもらってラオスで井戸掘りの支援をすることになりました。その井戸掘りは、当時私がいた団体を通じて支援することを提案していたそうです。実はその県では、どの団体もボランティア貯金をもらったことがありませんでした。ここを管轄する郵政省の出先は、どうしてこの県では、どのボランティア団体もボランティア貯金をもらっていないかと思い、ボランティア貯金をこの県のボランティア団体にもまわしてほしいと国際協会にお願いに行ったのです。お願いされて、国際協会は、その団体を知っているし、ラオスで井戸掘りならいいだろうといって、井戸掘りという計画を立てた。予算は120万円。ところが、井戸掘りの計画を考えていた村は、一つだけだったのです。必要なお金は20万円。でも県の国際交流協会は、どうしても120万円分の井戸を掘ってほしい。最終的にはなんとか120万円分の井戸を掘りましたが、もう二度とやりたくないということになってしまいました。このように、たった120万円かもしれませんが、別の要因で動いているのです。そういう中で、本来の目的である途上国の人達の支援をしたいと思い、どうすれば途上国の人達と一緒に生きていけるのだろうと、模索しています。それは簡単なことではありません。

〈常に考える力を〉

ODAの50年を振り返って、大きなところから話をしましたが、一つ一つの小さなプロジェクトを見ると、私がラオスで抱えた問題が、いろいろな形、レベル、規模で表れている難しいテーマではないかと思います。NGOの側も、NGOだからいいプロジェクトができるではなく、具体的にどのようにこういった課題を乗り越えてきたのか、例えば、ODAのような大きなプロジェクトでも、応用可能なものは応用したらいい。そういう議論をしていかなければ、表面的に、途上国の支援はいいことだとか、あるいは破壊的だとか、そういう一つの言説だけを振り回していたのでは、ODAはいらなくなる、あるいは批判されるだけで終わるのではないかと思います。これから皆さん、ODAのことを考える、あるいは青年交流事業の中で、途上国の人達と触れ合うときにも、こういう難しいテーマを常に持ってほしい。それを乗り越えるにはどうしたらいいかを常に考えてほしいと思います。どうもありがとうございました。

〈お詫び〉

vol.60号における（特活）メコン・ウオッチの団体名表記に誤りがありましたのでおわび致します。

～ターニング・ポイント～

松本　悟さん（特活）メコン・ウオッチ代表理事
第11回「東南アジア青年の船」参加青年

Q．どういうお気持ちで「東南アジア青年の船」（以下、東ア船）に乗ろうと思ったのですか？

松本：1983年に大学に入った最初の夏に、当時私が参加をしていたインターカレッジ、まあ大学を超えたサークルで、アジアの地域を中心に各国から学生が集まって「国際学生会議」というのを京都でやって「ああ、こういう世界というのも面白いな」と。

そこで聞く各国のアジアの現状とか面白かったし、そのときの先輩に「もし行くならこういうプログラムがあるよ」と初めて聞いたのが「東ア船」だったんです。その前に、自分でその学生組織の活動として、フィリピンとタイに行ったんですよ。そこは比較的リベラルな学生たちの集まりで、当時80年代の前半ですから、まだいろんな意味で社会の矛盾も今以上に大きい時代だったので、学生たちが一生懸命社会を変えるために何かをやろうとしようとしていた時期でした。そういう学生たちに触れて、かつフィリピンはまだマルコス政権の時代で、学生たちは、世の中を変えたいを言っていた。そういうのを目の当たりにして、その中で自分は学生として何がやれるかって考えたときに、同じ東南アジアでもぜんぜん違う層の人たちを見たほうがいいんじゃないかと考えました。

自分が大学1年の時に出会ったのは、比較的社会を「こういうふうに変えたい」とかいうことを考えてきた人たちだったけど、むしろ政府とか、その社会で今、いわば体制側でいる人とかもいるわけだし、何も深く考えてない人達もいるわけだし。じゃあ政府に近い側はどういう風に考えているのかな、と思ったとき、「東ア船」に乗れば、政府のプログラムだし、大学１年の時に出会わなかった人たちの考えに触れることができるだろうと考えたのですよ。まあもしかして、船で2か月東南アジアというのも魅力だった。これは言うまでもないけど、まだ十代だった頃の私達には、「ああいいな、なんか行ってみたいな」というような。

Q．実際事業としてはどうでしたか？

松本：船に乗って、っていうそれ自体はすごくなかなかない経験だと思うんですけど、そのプログラムを通して刺激があったかというと、実は刺激よりも、むしろ葛藤ですよね。やっぱり狭い船という社会に2か月間同じメンバーが居たわけですよね。かつ１カ国35人掛ける6か国とオブザーバー参加のブルネイという今より小さい規模の時代なわけですよ。210人余が2か月間一緒なわけで、大体みんなの顔を覚えるし、合わないやつ合うやついるし、キャビンメイトとでも反りが合ったり合わなかったりするじゃないですか。まあ最初は「日本と東南アジア」みたいに、こう考えるわけですが、やっぱり乗ってみると、当たり前だけれど、東南アジアにも嫌やな奴はいるし、いい奴もいる。つまり、東南アジアだから美しい世界とか、貧しくても活気があるとか、そういうステレオタイプで物をとっても言えないと。2か月缶詰になって彼らと付き合うことで、「日本とか東南アジアっていうよりは、もうちょっと、その人というものをちゃんと見ないといかんのだなあ」と。2か月であり、船だったということがあって、多分しみじみと感じることができたのではないか、というところはありますね。

Q．NHK記者時代からJVCを経て最終的にメコンウオッチの活動を立ち上げた、その流れというか考え方は？

松本：1983年にタイとフィリピンに行き、いろんな社会問題に触れ、社会を変えようとする学生に出会い、大学2年の時には、「東ア船」に乗り、フィリピンで言えばマルコス側の若い青年が来ていたり、様々な層の人たちと会って、意見の対立もあったし。意見の対立って、人と人との関係を築くには実は重要で、全部シンパシーを感じていては、相手を神格化してしまう、偶像化してしまうので、そういう意味でもよかったと思うし。3年の時にも、いろいろな所を廻り、特にベトナムとか、インドシナに行ってなかなか行くことができない違う側面を見ることができ、そういう中で徐々に作られていったと思うんですね、僕の東南アジアへの関心というのは。だから、おそらく「東ア船」だけでは断片的だし、その学生団体の体験だけでイメージを持っていては、それもまた断片的だし。僕は、今、東南アジアに関係していることを思うと、NHK時代の5年ちょっとを除けば、1983年から2004年まで、20年余関わっているわけで。それは毎年毎年、違う形で東南アジアに触れていったっていうことの積み重ねは大きいと思いますよね。

記者の経験から

NHKの記者の時代っていうのは、僕にとって何が重要だったかっていうと、地方にいたこと。初任地はで北海道であったこと。農村地帯であったり、凄い小さなコミュニティーで物を見ることができた。それは今に繋がっていると思いますよ。まあ東南アジアと北海道は全く違う社会ですけれど、東京のように、あまり実態がないところで頭で考えてやるのではなくて、北海道でその地に足をついて農家と話し、警察官と話し、行政と話、という中で見えてくるリアリティっていうのは、抱えているものは違うけれど、自分が大学で東南アジアで見てきたことと、僕のアプローチとしては近いと思いますね。という意味では、その記者時代に「ああやっぱりこういう形でコミュニティーとか地域の社会とかと自分がちゃんと何らかのかかわりがあるっていうのは大事だな」と実感した。その後結婚してNHKをやめて、NGOの立場でインドシナの国に関わった時に、自分の視点の中にはいつも、その社会的に問題を抱えている社会的な弱者の層の人たちへの視点は常にあるし、一方で行政っていうものが持っているロジック、考え方の枠組みっていうのは、絶対意識するし、一方そのコミュニティーの視点っていうのも大切にしたいという思いはある。そういうものが積み重なってきて、今の活動になってきていると思いますね。

こだわりを持って

こだわりを持ってその僕がメッセージを言えるとすれば「一番大事なのは、自分でそういうこう重層的に重ねていく。」ということ。せっかく何十万円も払うんですけど、それ以上の税金もそこには使われているわけだし、そういうプログラムに乗ったということを、より個人の人生にとっても社会にも還元するためにもね。継続的に、何かの形で、東南アジアという地域でもいいし、国際交流とか国際協力とかいう分野でもいいので、関わっていくということが、20余年経っていくと、少しずつ厚みが出てきて、社会に対しても働きかけができてくるようになったりすると、僕はそういう風に捕らえていく。まあ思い出の一角というよりは、いくつもこう積み重なった年輪のバウムクーヘンじゃないけど、年輪の中の一つの層になるっていうような意識なんじゃないですかね。

とくに若い層の人に言うとすると「1回限りで終わらせない方がいいよ」と。いいなと思った人にとっても、あんまりいい思いでじゃないなと思った人にとっても、まあせっかくこれだけ普通では得られない日々を過ごすわけですから、何らかのこだわりを持ってやっていくと、結果的には、何かに繋がるというのかな。

「佐賀から世界へ！ Step up And Go into Action in SAGA!!」

佐賀大会実行委員長　下村敏明

「青少年国際交流事業事後活動推進大会」「日本青年国際交流機構第20回全国大会」「第11回青少年国際交流全国フォーラム」佐賀大会に、全国各地から参加していただきありがとうございました。今大会の開催については、平成13年に山口で行われた全国代表者会議において決定されました。決定後まずは会場の手配と考え、県内の鳥栖、佐賀、唐津、嬉野、武雄などの候補地から、一つの会場で全て出来ること、飛行機で福岡空港に着かれる方や自動車利用の方の利便性などを考えて、高速道路のインターチェンジに近い大和町の龍登園としました。会場は決まりましたが、全国大会の参加経験者も少なく、どのような企画で行うのか、どういう進め方をしたらよいのかわからない状態でしたが、横浜大会と兵庫大会の資料を参考にしながら、皆様に佐賀の地に来てもらい、楽しんでもらう大会にならないかと考えました。

▲ 下村敏明実行委員長

▲ 開会式にて古川康佐賀県知事から御挨拶をいただく

実行委員会の実質的なスタートは、平成16年3月13日の内閣府青年国際交流事業説明会後の会議からでした。当日参加した9名の会員が実行委員の核となり、その後大橋・中野両副会長、酒井事務局長、九州各県の会長より助言を受けながら大会内容の検討を繰り返しました。7月以降は毎週のごとく日曜日の夕方に集まり、企画を進めていきましたが、スタッフも少人数で、しかも、残された時間も少なかったので後戻りもできず、「決めたら実行あるのみ」で進みました。

準備段階ではいろいろ苦労がありましたが、大会当日は多くの方にご参加いただいたおかげで佐賀大会は大いに盛り上がりました。開会式には、古川康佐賀県知事にも御出席いただき挨拶を頂戴しました。全国大会において開催県からの知事の出席は久しぶりのことで、佐賀県児童青少年課の皆様の御理解に深く感謝申し上げます。

（本文P18へ続く）

▲ 元「にっぽん丸」船長
渡辺輝夫氏による基調
講演

分科会 ▼

▲ 葉がくれ太鼓の皆様
熱演ありがとうございました

▲ 日本青年国際交流機構設立20周年記念事業として行っています

プログラムは、元「にっぽん丸」船長の渡辺輝夫氏による基調講演、5つのテーマに分かれて行われた分科会、2日目の内閣府青年国際交流事業報告会はどれも好評を博しました。また、バルーンフェスタ見学は早朝出発にもかかわらず沢山の方に御参加いただきました。

最後に、基調講演と分科会をしていただいた、渡辺輝夫様、一ノ瀬泰造写真展及び分科会をお世話いただいた、お母様の一ノ瀬信子様並びに辻村素彦先生、「やってみよう陶器絵付け体験」の分科会の富崎陶器様、「熱気球大会を楽しむ法」の分科会の山口俊弘様、「分かち合おう子供たちへつなげる国際交流体験」の分科会の園部ニコル様、歓迎交流会のスタートをかざっていただいた葉がくれ太鼓の皆様、内閣府青年国際交流事業報告会の発表者の皆様、準備段階から適切なアドバイスをしていただいた、大橋・中野両副会長、酒井事務局長をはじめとする役員の皆様、九州ブロックの各会長をはじめ会員の皆様に御協力いただきお礼申し上げます。また、福地事務局長をはじめとする実行委員の献身的な行動、佐賀県会員の協力により大会を終了することができましたことを誇りに思います。

皆様、ほんとうにありがとうございました。来年は、宮城県でお会いしましょう。

にっぽん丸 60S ～ Sailing on the waves of friendship ～

第３回「世界青年の船」**小林真由美**

第3回「世界青年の船」は1991年1月18日東京を出航し、太平洋、カリブ海を横断して3月20日帰国しました。日本青年だけになったハワイ～東京間で同窓会組織「にっぽん丸60S」を設立し、帰国後はニュースレターの発送や海外から参加青年が来日したときの集まりなどを通して会員間の交流を続け、節目ごとに総会やアドバイザーを招いての講演会を開催してきました。13周年の2004年は、中南米民俗学の第一人者で、私たちの団長である増田義郎先生をお招きし、「太平洋の歴史～民族の出会い」という演題で国際教養講座を開催しました。IYEO関係者をはじめ、中南米の専門家など多数の参加をいただきました。これからの太平洋の動きを注意深く見るようにという警鐘もあり、大変意義深い講演でした。翌日からさまざまな感想が事務局に寄せられました。いつも刺激を受けられるのが船の仲間の素晴らしいところで、企画して本当によかったと思いました。

下船当時はまだメールが一般的ではありませんでしたので、連絡をとりあうのに苦労をしました。国内で地道な事後活動を続け、世界に広げてきました。昨年10月に英語のメーリングリストを立ち上げ、現在約90人が参加しています。15周年の記念行事はさらに世界中のメンバーに呼びかけ、ビジネス交流や国際協力など実のある交流をしていこうと思っています。

「船」に戻る時間

実行委員長　柴　忠弘

折りを捉えて実施してきた沖縄、北海道、高知、岐阜、青森での各記念大会に引き続き、第3回「青年の船」35周年記念大会を平成16年10月23日と24日の両日に宮崎で開催し、全国から97名の仲間が参加した。

懇親会には、第6回「青年の船」の班長で乗船された安藤忠恕宮崎県知事の御出席をいただき、多忙なおりに2時間余在席して下さった。参加者は、地元の芸能を楽しみつつ、再会を喜び合い大いに語り合った。団員の年齢も55歳から60歳、勤め先や地域で責任ある立場にある者も少なからず、市町議会の議員や議長を務めている者の参加もあり、小玉管理官（79歳、昨年に筑波大学より文学博士を授与される）、吉岡教官（84歳）もお元気で参加して下さった。

大会終了後は、高千穂・西都原古墳・日南海岸などのツアーを楽しみ、2年後の石川大会での再会を約して全国に散って行った。

チャリティ版画展「ふるさと、魚沼、こころの情景展」

新潟IYEOの会員である尾身伝吉さんが、新潟と東京の版画家の仲間の皆さんと新潟中越地震の被災者のためのチャリティ版画展を開催します。売り上げの一部を義援金として寄付されるとのことです。尾身さんは、御自身も被災されましたが、大きな被害を受けた郷土の皆さんのために取組まれています。詳細は、ホームページで御覧下さい。

日程：2005年2月25日～26日
会場：東京新潟県人会館　東京都台東区上野1－13－6
電話：03－3832－7619
尾身伝吉（おみでんきち）
〒948-0031 新潟県十日町市山本920－1
TEL&FAX：0257－57－0316
E-mail denkichi@uonuma-artland.jp
http://uonuma-artland.jp/

平成16年度内閣府青年国際交流事業報告会

第31回「東南アジア青年の船」事業報告会

Knots of Heart　こころ ～それから～

今年度は『Knots of Heart　こころ～それから～』をテーマに、私たちがASEAN参加青年や訪問地の人々と心と心で触れ合った交流の様子、船内や寄港地での体験を、スライド、パネルディスカッション、展示、歌、踊りと様々な形で表現します。当日はぜひ会場までお越しください。（第31回「東南アジア青年の船」日本参加青年一同より）

主　催：内閣府政策統括官（共生社会政策担当）
（財）青少年国際交流推進センター
日本青年国際交流機構（IYEO）

日　時：平成17年1月23日（日）
13:00～16:30（開場12:30）
〈入退場自由〉

会　場：（独）国立オリンピック記念青少年総合センター
国際交流棟1階　国際会議室
（小田急線「参宮橋」駅下車徒歩約7分
東京メトロ千代田線「代々木公園」駅下車徒歩約10分）

参加費：無料

申込み方法：下記の問合せ先へ氏名、住所、電話番号、内閣府事業参加歴または紹介者名をお書きの上、葉書、FAX、メールでお申し込みいただくか、下記ホームページ上からお申し込みください。（当日参加も歓迎ですが、1月20日（木）までにお申し込みの方には会場にて「ASEANグッズ」をプレゼント！）

お問合せ先：（財）青少年国際交流推進センター
担当：渡辺・村上
TEL 03-3249-0767　FAX 03-3639-2436
E-mail: sseayp@iyeo.or.jp
報告会ホームページ
URL: http://www.iyeo.or.jp/sseayp/report2004

NEXT

平成16年度「国際青年育成交流」事業
「日中・日韓青年親善交流」事業

日　程：平成17年2月20日（日）13：30～17：00
（13：00～受付）

会　場：（独）国立オリンピック記念青少年総合センター
国際交流棟1階　国際会議室

参加費：無料

＊詳細は、ホームページにて掲載します。
URL: http://www.iyeo.or.jp/Air/2004/

（青少年国際理解セミナーの開催） 上智大学猪口邦子教授をお迎えしての青少年国際理解セミナーの開催が決まりましたので、お知らせします。詳細につきましては、ホームページ及び次号のマクロコズム誌上で御案内しますので、お申込みをお待ちしています。

日　時：平成17年3月13日（日）10時30分～12時30分（10時15分から受付）

講　師：上智大学　猪口邦子 教授

〈「にっぽん丸」船上リユニオンパーティーin横浜,2005〉

第17回「世界青年の船」が横浜港から出航することになりますので、「にっぽん丸」船上パーティーも横浜で行います。今年も楽しい一時を、夕陽と共に過ごしてみませんか。船の大好きな仲間と共に、そして船に興味を持っているお友達を誘ってぜひ御参加下さい。

日　　時：1月17日（月）18:00（受付）～21:00
場　　所：横浜港　大さん橋「にっぽん丸」
主　　催：日本青年国際交流機構（IYEO）
参 加 費：7,000円（当日受付にていただきます。）
参加申込：下記の連絡先まで、氏名、住所、電話番号、内閣府事業参加歴又は紹介者名を記載の上1月11日（火）必着で、葉書、FAX、メールにてお申込み下さい。
乗船証をお送りしますので、当日は乗船証をお持ち下さい。
＊なお、事前申込みのない当日参加はできませんので、御注意下さい。
＊詳細内容をIYEOホームページに掲載していますので、御希望の方はぜひ御覧いただければ幸いです。

プログラム
18:00　受付（ティー・サービス／船内見学、ビデオ上映）
19:00～21:00　パーティー（エスニックなお料理をお楽しみ下さい。）～下船～

連 絡 先：〒103-0013　東京都中央区日本橋人形町2－35－14　東京海苔会館6階
日本青年国際交流機構（IYEO）船上パーティー係
TEL 03－3249－0767　FAX 03－3639－2436　E-mail hq@iyeo.or.jp

編集後記

あけましておめでとうございます。激動の2004年を越えて新年を迎え、皆さんはどのような抱負をお持ちですか。世界情勢が厳しくなるほど、青年に対して求められるものが大きくなります。

平和慣れした日本人にとって、考えなければならないことが山積みしている時代のようです。

＊本誌の年間講読をご希望の方は、(財)青少年国際交流推進センターまで葉書又はFAXにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM（マクロコズム）　1月号　Vol. 62　2005年1月1日発行（隔月発行）

編　集：マクロコズム編集委員会
発　行：財団法人　青少年国際交流推進センター
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14
TEL　03-3249-0767
FAX　03-3639-2436
e-mail　hq@iyeo.or.jp
URL　http://www.centerye.org (IYEO)

編集協力：内閣府政策統括官（共生社会政策担当）
日本青年国際交流機構
定　　価：198円（本体189円）
印 刷 所：株式会社　絢文社
TEL　03-3959-3960

乗組員みんなの、
笑顔に満ちたにっぽん丸でありたい。

にっぽん丸サードパーサー　亀井　亮

商船三井客船(MOPAS)は2004年創業120周年を迎えました。

USPH=米国公衆衛生局は米国に入港する客船に対して毎年抜き打ちで衛生検査を実施しています。にっぽん丸は、2000年から3回連続して100点満中99点を取るなど、日本船では最高の評価を4年間受け続けています。

MOPAS 冒険する生活 にっぽん丸

サードパーサー亀井は、いつも時間に追われている。パーサーの仕事について6年目を迎える彼だが、この間、先輩たちから徹底的に教え込まれた哲学は、逆算して仕事をすべし。ということ。「仕事は、次から次へと増えてゆきます。ですので、常に先手先手で仕事をしていかないと対応しきれなくなってしまうのです」。そうした状況が、昼となく夜となく続いてゆく。それでもこの仕事が好きだと亀井は言う。「お客様から頂戴する、ありがとうのひと言。そして笑顔。優等生的な発言と思われるでしょうが、私にとって、これに勝る喜びはありません。またそうしたことを、全ての部門の乗組員が心得ているのがにっぽん丸です。私はパーサーという立場にあって、そうしたおもてなしの気持ちはどの船にも負けないと自負しています」と胸を張る。そしてまた「だからこそ、まずは乗組員みんなが、常に笑顔で仕事をすることが何より肝心。お客様の笑顔に私たちがチカラをもらうように、お客様もまた私たちがいつでも笑顔で接していれば、やはり気持ちが良いでしょう」と。目が回るほど忙しい亀井の毎日。そんな彼が見せた笑顔もなかなかであった。

NIPPON MARU

もてなしにも、品質があります。にっぽん丸の船旅

「Oasis にっぽん丸 ー春の楽章ー」
横浜→（伊豆諸島周遊）→横浜
2005年3月3日(木)～3月5日(土) 98,000円

小笠原スプリングクルーズ
横浜→父島(二見)→横浜
2005年3月6日(日)～3月11日(金) 230,000円

オセアニア・エクセレント。
神戸→横浜→サイパン→ニューカレドニア→ニュージーランド→オーストラリア→パラオ→神戸→横浜
2005年3月21日(月・祝)～5月2日(月)

週末利用 春のワンナイトクルーズ
横浜→(伊豆大島付近周遊)→横浜
2005年3月5日(土)～3月6日(日) 44,000円

週末利用 春の伊豆諸島周遊クルーズ
横浜→(伊豆諸島周遊)→横浜
2005年3月11日(金)～3月13日(日) 88,000円

2006年世界一周クルーズ
横浜・神戸 発着(各101日間) 19ヶ国24港
2006年4月6日(木)～7月16日(日) 2,900,000円

そのほかのクルーズもご用意しております。表示の代金はステートルームC1室を2名でご利用の場合の大人お一人様・国内クルーズは消費税込の旅行代金です。＊各種のコースがございます。

商船三井客船
MOPASは商船三井客船の愛称です。 〒107-8532 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル5F

お問合わせは、各クルーズ取扱旅行会社またはMOPASクルーズデスクへ。
クルーズデスクフリーダイヤル 0120-791-211 http://www.mopas.co.jp

美しい時代へ── 東急グループ

商品力、サービス力、情報力、3つのパワーで、
あなたの旅をさらに快適に。

どんな旅でも、東急観光はすべてのお客様に満足していただきたいと願っています。そのために、オリジナル旅行や団体旅行など、多彩な商品をご用意。IT活用による最新情報入手から24時間予約まで、リアルタイムな体制でお応えします。そして旅を熟知した私たちのひとりひとりが、お客様の旅を親身になって考えます。

東急観光

国土交通大臣登録旅行業第38号
日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員
〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目8番1号
http://www.tokyukanko.com
http://tour.tokyu.com

マクロコズム　2005年1月号　通巻六十二号隔月発行　定価一九八円（本体一八九円）　編集協力：内閣府政策統括官（共生社会政策担当）日本青年国際交流機構